



妙見思想・妙見菩薩



紫微垣 北辰 妙見

星神信仰より ⇒ 北極星の化身として ⇒ 妙見菩薩＝北斗七星

北辰妙見

妙見信仰 ※ 方向を決める、生きる道を決める、今日で云う「生きる力」
「豊かな心」に共通する。

- アッシリアやバビロニアなどの砂漠の遊牧民は、星を頼りに遊牧した。北極星は命の星だった。遊牧民がインドに伝え、それが「大藏経」に組み込まれ、仏教上のものとなり、又中国では、道教・儒教・陰陽道の星信仰となっていた。
- 日本には、600年代後半に伝わった。
- 天智天皇の頃に関東に強く入ってきた。
- 900年代には、天台宗比叡山に定着する。
- その後、日本全国に波及する。
- 天台宗では、妙見菩薩⇔吉祥天⇔一字金輪仏などと相関関係の考えもある。
- 北斗七星＝木・火・土・金・水に、日と月を合わせて7曜7星と考えた。
- 七曜のうち五曜、木・火・土・金・水を妙見五行と称するようになった。

(東北の妙見思想)

- ◆ 特にも、千葉一族の名将千葉常胤は、頼朝と共に妙見信仰者であった。
- ◆ 相馬氏やその縁者である伊達一族も妙見信仰をとった。
- ◆ 千葉常胤の子息、長坂城（唐梅館）初代頼胤も当然妙見信仰であることに相違ない。
- ◆ 長坂城初代（建久元年 1190 年）千葉頼胤から 22 代広胤（天正十八年 1590 年）まで 400 年間は妙見信仰に相違ない。
- ◆ 江戸時代に入り、仙台藩祖伊達政宗も妙見五行・小笠原流五行（仁義礼智信）を信条とした。
- ◆ 天星を紋とした、月星紋・九曜紋は一族の家紋として歴史に輝いている。伊達家・田村家の家紋の一つでもある。
- ◆ 妙見五行・小笠原流五行伝は、武士道・武士の礼作法をはじめとし庶民の礼作法ともなり、今日も伝承されている。
- ◆ 世界遺産「和食」に関連する、一関・平泉地方の儀礼式食文化一関地方「もち本膳」は、まさにその姿を伝えている。
- ◆ 妙見信仰の著名人には、伊能忠敬、千葉周作、後藤新平、新渡戸稲造、宮沢賢治などがいる。

東北の妙見信仰を今に残す

みちのくの古刹 妙見山 黒石寺

岩手県奥州市水沢区黒石町

山内の小高い所に妙見堂があり、妙見菩薩三尊像が祠られている。千古の歴史に輝く黒石寺には、東北に妙見信仰がいかに栄えたかを物語っている。



妙見菩薩三尊像

妙見尊皇王や北辰菩薩ともいい北極星を神格化しその本地仏。童顔の武将仏で玄武（亀と蛇の合体した想像上の動物）に乗り、唐服を着、笏や剣を持つ。脇侍は北斗七星を示す北斗菩薩。道教・陰陽師の影響が強く、武運長久、国家安穩、五穀豊穡の尊神であるが、物事の真相を見極める霊力があるとされることから眼病平癒の霊力を持つといわれる。平氏、源氏の妙見信仰には篤いものがあった。薬師堂北側の妙見堂本尊。像高 75 cm。（黒石寺記事）



妙見堂

山号を妙見山と称する天台宗黒石寺

嘉祥二年（849）、天台宗三代座主慈覚大師円仁が錫を東奥に曳き、堂背の大師山に至り、岩窟に座禅し、行基菩薩の霊夢を感じ、薬師寺を岩窟の蛇紋岩に見て黒石寺と、北の山中に妙見祠があることから山号を妙見山と号して再興、四十八宇を造った。これにより全山天台宗とし、薬師如来を本尊とするが故に薬樹王院とも号した。

貞観四年（862）、薬師如来像造立。永承二年（1047）、慈覚大師像造立。それぞれに墨書があり、貞観銘は日本最古のものである。同時代の四天王像、平泉時代に寄進された日光・月光両菩薩、鎌倉初期の十二神将像はいずれも奈良や京の影響が見られ、宗風に於いても大きな関連があったことを忍ばせられる。



天台宗の古刹黒石寺は、729年（天平元年）、行基菩薩の開基で、当時「東光山薬師寺」と銘打って建立された。



東北千葉氏の居館 長坂城^{からうめ} (唐梅館)

長坂千葉氏系図に依ると頼胤は千葉介常胤の子息で、藤原泰衡滅亡の後、葛西麾下の旗頭として伊沢百岡と唐梅館の二城を頼朝から与えられ、奥州に下向し建久元年(1190)正月二十日、その子良胤とともに百岡から唐梅館に移り住み、以来約四百年間にわたって栄えたが、天正十八年(1590)葛西氏滅亡とともに沈淪したと伝えている。

唐梅館跡は、長坂の町並の北方、猿沢川沿いの館山にある。山頂の本丸跡に立つと一望のもとに遠く四方を眺望することができ、この本丸を中心に土壇が円郭式状に巡らされており、西側には空濠があり南側の土壇には池がある。また、本丸下の四辺は挿入鉢を伏せたかのような急峻な地形になっており、容易に足を踏み入れる事ができないという天険の要害である。いま本丸をめぐる西方の土壇上には初代城主頼胤の供養碑が建っている。なお、この唐梅館は天正十八年四月十八日葛西麾下の諸将が参集し、豊臣秀吉から令達のあった小田原参陣をどうするかという葛西氏・千葉氏の命運を賭けた重大な軍議が行われた由緒ある館である。

安永風土記、岩手叢書、仙台領古城館書上などに次のように記されている。唐梅館は南北二十七間、東西十七間あり、長坂千葉氏がここを居城した。その前は平泉藤原氏の家臣、照井太郎高春(一説には高直)の居城であった。なお、千葉氏には唐梅館他に長坂南山谷に搔引城(駆引城・榆引城)という居城があった。唐梅館は險峻の地であるため、平常はここに住んでいた。現在の場所は住宅地になっているが、空濠の跡は今も残っている。

東北の千葉一族の武士道 唐梅館絵巻



唐梅館絵巻出陣祝賀の宴 四方催の口上の一例

北の玄武に炎を上げ、妙見菩薩に願いを込め、南に朱雀の舞を見て、東の青龍の水を飲み、西の白虎の飯を食い、いざいざ出陣である。

東北は
凡そ 400



年に一度の大きな戦があり、いずれも東北側の負けであった。坂上田村麻呂に負け、源義家に負け、源頼朝に負け最後は天正十八年（1590）に豊臣秀吉仕置軍に名門葛西・千葉一族が敗れた。

その、豊臣秀吉の全国統一総仕上げとなる小田原の北条氏攻めに、各地方豪族へ「秀吉に味方し小田原に参陣すべし。」と達しが発せられ、これを受けた東北の葛西・千葉一族の各将は長坂城（唐梅館）に集まり軍議を開いた。この場面を再現したのが唐梅館絵巻である。

唐梅館絵巻は、平成十三年に第一回を開催し、本年で十八回目を迎える。当時の領主であった葛西晴信と長坂城主（唐梅館）千葉広胤を主役に、広胤役は毎年俳優を呼び、馬十騎と三百余名の武将が三キロあまりの道中を鎧武者姿で歩き唐梅館に勢揃いする。

「叶うべきにはあらねども、まず以て迎え陣を出し一戦、叶わざる時は腹切らん。」と、総大将十七代葛西晴信公のことばに励まされ、千葉一族、東山長坂城（唐梅館）に軍議・評定し死を覚悟で秀吉軍にたちむかった。このことを、次代に伝えることが今を生きる我々の務めと思い、その姿のひとつとし軍議の再現を行った。

水と緑と人情ゆたかなみちのくは、負けても負けても立ち上がろうとする精神と、互いに手を取り助け合う心をもってこそ、今日の人情ゆたかな東北を作り上げたのであります。

平成 30 年 5 月 27 日

第 2 回全国千葉氏歴史文化フォーラム
岩手県一関市 佐藤育郎